公將臣印全集

第二十六卷

谷崎潤一郎全集　第二十六卷
定價二八〇〇圓
昭和四十三年十月二十五日初版發行
昭和四十九年十一月十日普及版發行
著者　谷崎潤一郎
發行者　高梨茂
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一
振替東京二―三四

蓬生

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

イ、わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩垂れつつ侘ぶと答へよ〔古今集〕
ロ、紫の上
ハ、末摘花
ニ、「末摘花」二一四頁以下参照

蓬生

「藻しほたれつつ」侘びしく過していらしった頃、都でもさまざまに歎いていらっしゃる人が多かったのですが、それでも身の寄り所のある方々は、ただ恋しいという一筋の思いに悩んだだけなので、二条の上などもお気楽に、配所の方ともしげしげおん文の遣り取りをなさりながら、官位を失い給うたお人の、仮初のおん装束などをも、世の憂きふしの折々につけて送ってお上げになったりして、心を慰めていらしったのでした。それにひきかえて、なかなか君の思い人とは世にも知られず、お旅立ちになった時の御様子をも、餘所ながら噂に聞いて想像しつつ、切ない思いを胸のうちに包んでいたというような人々も多いのでした。

常陸宮の姫君は、父親王がおかくれなさいました後は、ほかにお世話申し上げる人もないお身の上で、ひどく心細そうにしていらっしゃいましたのを、思いがけない行きが

かりからお通いなさるようになって、ずっとつづいていましたので、君の御威勢から言えば、ほんに何でもない、ちょっとしたお情をおかけになったおつもりなのでしたが、お待ち受けになるお方の、見るかげもない御境涯では、大空の星の光を盥の水に映した心地で、過していらっしゃいますうちに、ああいう騒ぎが起って来まして、君も浮世のあらゆることが厭におなりになったりしたお取込みの中で、特に深くもおありにならない人たちのことなどは、お忘れなされたようになって、遠く田舎へお出かけになりましてから後は、わざわざおたよりもしてお上げになりません。当座の間は泣きながらも暮していらっしゃいましたものの、年月を経るにつれまして、しみじみと寂しいおん有様になって行かれます。古い女房たちなどは、「やっぱり御運勢が拙くっていらっしゃったのですね。一時は思いがけなく神佛が出現なさったような風で、人はこういう仕合せな御縁を引き出すこともあるものかと、珍しく存じ上げておりましたのに、おしなべての世の習わしとは申しながら、ほかに頼るお方もいらっしゃらないおん有様とは、何という情ないことでしょうか」と、呟いて歎くのでした。貧しいなりに暮していたこの年月は、言いようのない寂しさに馴れて過していらっしゃいましたのに、なまじ中途で少少ばかり世間並みな暮しを覚えたために、あとが一層堪えがたく感じられて歎くのです。少しは嗜みのある女房たちも自然寄り集っていたのですけれども、皆つぎつぎにあちら

こちらに散ってしまいました。中には死ぬ者もあったりしまして、月日が立つに従って上下の人数が減って行きます。もともと荒れていました御殿のうちが、ひとしお狐の棲み家になりまして、無気味に、森閑と生い茂った木立ちの奥に梟が啼きますのを、朝夕耳にするようになりますと、これまでは人気がありましたからこそ、そういうものもそれに圧されて姿を隠していたのですが、今は木霊などという怪しい物どもが所を得て、次第に形を現わし、いろいろ佗びしいことばかりが起って来ますのに、たまたま残って仕えています侍女たちは、「もうたまりません。この頃受領などの、面白い家造りを好みます者が、この御殿の木立ちに目をつけまして、お手放しになりませんかと、つてを求めて申し込んで参るのがございますが、そう遊ばして、かような世にも恐ろしい所でないお住居へお移りなさりませ。ここではお側に残っております者も、とても辛抱がなりかねます」などと申し上げるのですけれども、「まあ、ひどい。世間の思わくもあることですし、私が生きています間は、どうしてそんな昔を忘れたことができましょう。こんなに恐ろしく荒れ果てましたけれども、親のおん面影がとどまっているなつかしい住みかだと思えば、どんなに慰められることか」と、泣くばかりで、夢にもそんなことはお考えになりません。おん調度の類も、たいそう時代のついた、手馴れた品々で、昔風に、立派にできていますのを、生物識りの風流がった男などが手に入れたがって、誰

某の名人にわざわざ作らせ給うたと聞き出して来ては、案内を乞うて、ああ貧乏でいらっしゃったらと、侮りながら申し込みますと、例の女房たちは、仕様がない、物を売り払ったりすることも、世間にはよくあることだからとうまく取り計らって、目前にさし迫った暮しの辻褄を合わせようとする時もあるのですが、きつくお叱りになりまして、「私が使うようにとお思いなさればこそ、拵えておおきになったのです。何として軽々しい身分の者などの、家の飾りにさせましょうぞ。亡きおん方の御本意に背いては申しわけがありません」と仰せられて、そういうことはおさせになりません。ついちょっとしたことにでも訪ねて来てくれる人もないお身の上で、ただ兄君の禅師の君ばかりが、たまに京に出ていらっしゃる時にはお立ち寄りになりますけれども、それも珍しく古風なお人で、同じ法師という中でも、寄るべのない、浮世ばなれのした聖でいらっしゃいまして、ぼうぼうと伸びた草や蓬を刈り取ったらばというほどのことをさえ、思いついても下さいません。そんなわけなので、浅茅は庭の面も見えないように茂り、蓬は軒と高さを争って伸びています。葎が西東の御門を、しっかり閉じ固めてくれたところは用心がよいのですけれども、崩れがちな周囲の築地は馬牛などの踏み馴らした通り路になって、春から夏には、牧童が放し飼いをする不埒さです。八月の野分が吹き荒れました年に、廊なども倒れ、雑舎の粗末な板葺であった建物などは、骨組ばかりが僅かに残り

まして、今では下司も踏みとどまって住んではおりません。朝夕のけぶりも絶えて、哀れにみじめなことが多いのでした。盗人などという向う見ずな輩も、見つきが寂しいからでしょうか、この御殿ばかりは用のないものとして、通り過して、寄りつきもしませんので、そういう凄い野ら藪ですけれども、さすがに寝殿の内だけは、昔のままの飾りつけがしてありますが、つやつやと拭き掃除などをする人もいません。塵は積りながらも、確かにそれと頷かれる麗しいお住まいには違いないので、その中に明かし暮していらっしゃいます。

はかない古い歌や物語のようなものを相手にしてこそ、つれづれをも紛らわし、こういう住まいのやるせなさも慰められるものなのですが、さような方面の嗜みにも後れていらっしゃるのです。たって好ましいことではありませんが、自然退屈な時などには、同じ心の者同士で文の遣り取りなどをしましてこそ、若い人は折々の木草の風情につけても、憂いをお忘れになるはずですのに、親御がお育てになったしきたりをそのままに、世間を気の置けるものと思っておいでなされて、たまにはお便りをなさらねばならない方々へも、さっぱり馴れ馴れしくなさいません。古ぼけた御厨子を開けて、唐守、藐姑射の刀自、赫奕姫の物語の絵に画いたのを、ときどき弄び物にしていらっしゃいます。古い歌でも面白いのを選び出して、題だの読人だのを明らかにして説いてあるのは見所

イ、ロ、当時の物語であるが、今伝わらない
ハ、竹取物語のこと

イ、京都の北郊にある紙屋川で漉いた紙
ロ、檀紙。イもロもともに儀式ばった紙で風流気のないもの

もありますが、模様もない紙屋紙や陸奥紙などのぶくぶくしたのに、誰でも知っている古歌を書いたのなどは、ひどく無趣味なものですのに、よくよくお寂しい折々には、そんなものをひろげていらっしゃいます。今の世の流行である読経や勤行などということは、たいそう気恥かしくお思いになっていらしって、世話をして上げる人もないのですけれども、数珠などを取り寄せ給うでもありません。そういったように万事が几帳面でいらっしゃるのでした。

侍従とやら言いましたおん乳母の娘だけは、長年のあいだどこへ行こうともせずに仕えていましたけれども、掛け持ちで通っていました斎院がお亡くなりになったりしまして、たまらなく心細がっています折から、この姫君の母北の方の妹で、零落して受領の妻になり下っていらっしゃる方がありました。娘どもを養育していまして、みめよい若い人々を抱えたがっていますので、全く知らない所よりは、親の代にも奉公したことがあったのだからと思って、ときどきそちらへ通っています。姫君はそういう人馴れないお方ですから、そんな人たちと親しい交際もなさいません。叔母君は「故姉君は私を馬鹿になすって、御自分のお顔にかかわるように思っておいでしたから、姫君のお気の毒な御事情は分っていますが、わざとお見舞いにも伺いません」などと、侍従に向って憎まれ口をききながらも、おりおりは音信をするのでした。生れつきからそういう平凡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

な身分の人は、かえっていい人の真似をしようと心がけて、上品ぶるのも多いのですが、貴い血筋を受けながら、こんなにまで落ちぶれる人はそういう宿世があるのでしょうか、少し心に卑しいところのある叔母君なのでした。自分の地位が低いために見下げられていましたについては、何とかしてこういう成り行きにつけ込んで、あの姫君を内の娘どもの召使にしてやりたいものだ、性質などに時勢おくれのところはあるが、あれなら安心して世話役を頼める、と考えまして、「ときどきはこちらへお越しになって下さいまし。お琴を聞かしていただきたく思っている人もおりますから」と言って来るのでした。侍従も始終そう言ってすすめるのですけれども、格別意地を張るというのではなくて、ただ恐ろしい引っ込み思案のお方ですから、それほど親しくなさいませんのを、先はいまいましがっているのでした。

そうするうちに、この叔母君の主人が太宰大弐になりました。娘どもを皆それぞれに縁づけておいて下向しようとするのです。やはり何とかしてこの姫君を誘い出そうと考えまして、「今度遠国へ参りますにつきましては、心細いおん有様が気にかかってなりません。この年ごろは御無沙汰をしておりましたとは申せ、御近所に住んでおりました間は安心でございましたが、これから後はほんとうにどうなさいますやら」などと、言葉巧みに持ちかけて来るのですが、一向承知なさいませんので、「まあ憎らしい、もっ

たいぶって。御自分一人で己惚れておいでになっても、あんな藪原の中に幾年も住んでいらっしゃるような人を、何で大将殿が大切にお思い申されましょうぞ」などとけちをつけるのでした。それから間もなく世間の思わく通り君は都にお帰りになり、天が下に歓びの声が満ち溢れます。何とかして人より先に自分の深い志を見ていただきたいとばかり、競い合う男や女や、身分の高いのや低いのや、さまざまな人の心を御覧になりまして、いろいろと世の中の表裏をお悟りになります。それやこれやのお忙しさで、この姫君のことなどはさっぱり思い出して下さりそうな様子もなくて、月日が過ぎて行くのでした。あゝ、もう望みも空しくなった、年ごろ君がおいたわしいおん有様でいらしったのを、えらく悲しいことに存じ上げながらも、再び萌え出ずる春にお遇いになるようにと祈りつづけていたのに、下様の者どもまでが喜び合う時勢になって、君も立派な官位におつきになったりするのを、今は他人事のように聞いていなければならない、都を落ちていらしった折の憂さ辛さは、ただ自分一人が負うために起ったことのように感ぜられたのに、そのかいもない世であったと、急にがっかりして、恨めしく悲しくて、人知れず声をあげて泣いてばかりおいでになります。大弐の北の方は、それ見たことか、あんな風に独りぼっちで、みすぼらしい御様子をしておられるものを、相手になさる人があるものか、佛や聖も罪の軽い人をこそ導いて下さるのだ、あんなおん有様で、まだ

イ、ロ、よの憂きめみえぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれ〔古今集〕

意地を張って、父宮や母君がいらしった時の流儀を通そうとなさるなんて、その高慢がお可哀そうだと、馬鹿々々しさに呆れながら、「やっぱり御決心なさいませ。『世の憂きめ』に逢う時は、『見えぬ山路』を尋ねると申します。田舎などはいやな所だとお思いになるかも知れませんが、決してそんなに不体裁なおもてなしはいたしません」などと、たいそう上手に持ち込みますので、もうすっかり気を腐らしている女房たちは、「そうなすって下さらないものかしら。どうせろくなことはおありになりそうもないのに、何と思し召してあんなに強情をお張りになるのか」と、ぶつぶつ言います。

侍従も、あの大弐の甥か何かに当る男を夫に持ちましたのが、都に残して置きそうもありませんので、思いもよらぬ旅に出るにつけましても、「お残し申して参りますのが、心苦しく存ぜられまして」と、おすすめ申し上げるのですが、今になっても、かけ離れてからこんなに久しくなり給うお人に、頼みをかけていらっしゃるのです。お心のうちに、そうは言っても長い間にいつかは思い出して下さる折がないことがあろうか、あれほどしみじみと、情をこめてお誓いになって下すったものを、わが身の不運からこういう風に忘れられているだけなのだ、風のたよりにでも、こんなみじめな様子でいることをお聞き込みになったら、きっと訪ね出して下さるであろうと、この年月思いつづけていらっしゃいますので、御殿の風情も一頃よりはなお荒れまさっていますけれども、御

自分一人気を張って、ちょっとしたお手道具一つでさえもなくなさず、昔の通りになさりながら、心強く辛抱しておいでになるのでした。そして涙にかきくれながら一層物思いに沈んでいらっしゃいますところは、まるで山樵が赤い木の実を顔の真ん中にくっつけて放すまいとしているようにお見えになります。そのおん横顔などは、大概な者には我慢のできる御容貌ではありません。が、まあそんなことはあまり詳しくは申しますまい、お気の毒でもありますし、口さがないようでもありますから。

冬になって行くにつれて、ひとしお取りつく島もなく、悲しそうに、ぼんやりと過していらっしゃいます。君のお邸では故院のおんための御八講を、世間じゅうの騒ぎになるほどにお催しになります。ことに僧などは並々の者はお召しにならず、学問もすぐれて修行の功を積んでいる、貴い人々の限りをお選びになりましたので、あの禅師の君もお呼ばれになりました。お帰りがけに姫君のところへお寄りなされて、「これこれの次第で、権大納言殿の御八講に参ったのです。たいそう厳かに、この世ながらの浄土とはこういうものかと思えるくらいお立派に、趣向の限りを尽くしておありになりました。あのお方は佛菩薩の変化でいらっしゃるのでしょうな。五濁の末世にどうしてお生れになったことやら」と言って、そのままお帰りになるのでした。言葉少なの、普通と違った御兄弟でいらっしゃいますので、無益な浮世の物語などはお互いになさいません。姫

イ、この姫の赤鼻のことは「末摘花」二三六頁以下に詳しい

ロ、「澪標」五一七頁参照

ハ、劫濁、見濁、命濁、煩悩濁、衆生濁の五つの穢れをいう

ニ、三径就荒松菊猶存〔陶淵明「帰去来辞」〕三径は庭の中の三つの小路で、隠遁者の庭をもいう。漢の蔣詡が、庭中に三つの径を作り、松、菊、竹を植えた故事にもとづいている

君は、それにしてもこうまで不仕合せに泣いている身を、無慈悲に打ち捨てて構っても下さらないとは、情ない佛菩薩もあるものよと、恨めしくお思いになりながら、いかにも見限られたのだと、ようようおあきらめになっていらっしゃいますと、突然大弐の北の方が訪ねて来ました。いつもはそれほど仲好くしてもいませなんだのに、連れ出そうという下心から、御進物のおん装束などを取り揃えて、いい車に乗って、顔つきや身ぶりも得意そうに、さも屈託のなさそうな様子をして、不意に押しかけて来て門を開けさせますと、まずその辺の薄気味の悪さ、寂しさといったらありません。右左の扉も皆がたがたと倒れて来ますので、供の男どもが手伝って、大騒ぎをしてようよう開けます。この廃れた宿にも、必ず人の足跡のついた三つの径はあるはずだが、いったいどこにあるかしらんと辿って行きます。僅かに南面の方に格子を上げた一間がありますので、そこへ車を寄せますと、大弐風情の北の方が無躾千万なとお思いになるのでしたが、ひどく煤けた几帳を差し出して、侍従が出て来ました。顔かたちなどが窶れて、近頃すっかり衰えてはいますが、やはり何となく垢抜けのした、気の利いた様子をしていまして、もったいないことですけれども、いっそ姫君と取り換えたいくらいに見えます。

「旅立とうと存じながら、お可哀そうなおん有様でいらっしゃいますのを、どうもお見捨て申しかねておりましたが、今日は侍従の迎えに参ったのでございます。いつも私を

お嫌いなすって、御自分はちょっともいらしって下さいませんが、せめてこの人だけでもお許しがいただきたくて。でもまあ、一体この御様子は」と言って、普通ならば泣きもするところでしょう。けれどもこれから先に待っている幸福を思いやって、よほど嬉しいらしいのです。「故宮がいらっしゃいました時分に、私がお顔を汚したようにお思いになって、寄せつけて下さいませなんだので、疎々しいようになりかけておりましたが、でも私は従来も決して疎略には思いませなんだ。ただたいそうおえらいように思い上っていらっしゃいましたし、大将殿などがお通い遊ばす御運勢では、とてもお側へ寄りつけないと存じましたので、親しくお附合いいたすことも御遠慮申し上げる場合が多うございましたが、世の中というものはこんな具合に変りやすいのでございますから、身分の低い方がかえって気楽というものでございます。昔は及びもつかぬおん有様でいらっしゃいましたのに、ほんとうにおいたわしく、心苦しく存じますが、御近所に住んでおります間は御無沙汰をいたしましても、いつでもお世話できると思って、のんきに構えておりましたけれども、今度は遠方へ参りますので、あとに心が残りまして、悲しゅう覚えます」と語るのですが、打ち解けた御返事もなさいません。「お志はたいそう嬉しいのですけれども、私のような変り者が、餘所へ行ったとて何になりましょう。このまま埋れて、朽ちてしまった方がと存じます」とばかり仰せられますので、「なるほ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com